

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 9 日現在

機関番号：17702

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652151

研究課題名(和文) 語感を養成するのに適した英語多読の教授法に関する計量的研究

研究課題名(英文) A NUMERICAL STUDY ON THE OPTIMUM WAY TO READ ENGLISH BOOKS EXTENSIVELY TO IMPROVE LEARNERS' ENGLISH PROFICIENCY

研究代表者

国重 徹 (KUNISHIGE, TORU)

鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・教授

研究者番号：50225174

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円、(間接経費) 330,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、英語検定4級～3級レベルの徳山高専1年生及び3級～準2級レベルの2年生の英語の語感を養成するのに最適な多読・多聴の方法を計量的に明らかにした。実施直後に実施する新入生テスト、英語の検定試験ACE(Assessment of Communicative English)の結果と多読記録のデータの関係を分析した結果、1年生では、900語/冊の本を、2年生では、1,000語/冊の本を大量に多読・多聴することが最も望ましいということを明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：This research has numerically explicated that on the whole, it is the most effective for the first-year students at Tokuyama College of Technology to read books with about 900 words on average so as to enhance their English proficiency. Also, it has been made clear that in general, it is the most desirable for the second-year students at Tokuyama College of Technology to read books with about 1000 words on average in order to improve their English proficiency.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語多読 多聴 語感

1. 研究開始当初の背景

近年、英語の多読教材を用いた授業実践が増えており、豊田高専の西澤一先生他は「工学系学生の苦手意識を克服し自律学習へ導く英語多読授業」(2010)の中で、また、SEGの古川昭夫先生は「英語多読法」(2010)の中で、多読により学習者の英語力が向上したという報告をしている。

しかし、これらの報告は、多読を2年間続けた学習者のTOEICスコアの伸びが何点であったというものや、多読により10万語読んだ学習者がTOEICを受験したらスコアが何点であったというものが中心である。

そのため、どのレベルの本を何語程度読めばどれだけ英語の力が伸びるのかを計量的に知ることは難しい。

また、どのレベルの本をどのような組み合わせで読むのが効果的であるのか、また、読む語数が同程度である場合同じ本を繰り返し読むのと、異なる本を読むのとではどちらが効果的であるのかという点についても、計量的には明らかになっていない。

さらに、高瀬敦子先生は「英語多読・多聴指導マニュアル」(2010)の中で、多読の授業が失敗する原因の1つとして、指導者が適切な多読の進め方を示せない点を挙げている。適切な学習メニューが数値的に明確にされていないのだから、失敗例が出現するのも無理はない。

多読の効果に対して懐疑的な教師が存在するのも、効果的な多読の学習メニューが計量的な研究により、数値的に裏付けられた形で明示されていないからに他ならない。

そこで、これらの問題点を解決するために、本研究を遂行しようという着想に至ったのが研究当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究では、研究責任者が平成25年9月まで所属していた研究機関(徳山工業高等専門学校)の新入生及び2年生の英語のproficiencyや語感を養成するのに最適な多読・多聴の方法、すなわち、どのレベルの本(1冊当たり平均英語が何単語含まれている本)を大量に読むのが最適であるかを数値的に明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1)まず、新入生に関しては、徳山工業高等専門学校の入学生(平成24年度入学)の英語力を測る新入生テストの結果とこの入学生が1年生の間に多読・多聴で読んだり、聴いたりした本の1冊に含まれる平均語数(彼らの多読・多聴記録用紙から算出)の関係、及び、英語のproficiencyや語感がどれだけ身についたか等を数値的に測る英語の検定試験ACE(Assessment of Communicative English)テストの結果と1年時の多読・多聴で読んだり、聴いたりした本の1冊に含まれる平均語数の関係を、データに基づき数値的

に明らかにするという方法で分析した。

(2)次に、2年生(平成23年度入学)については、彼らが2年次に受験したACEテストの結果と1年次に受験したACEテストの結果と彼らが2年生の間に多読・多聴で読んだり、聴いたりした本の1冊に含まれる平均語数(彼らの多読・多聴記録用紙から算出)の関係、及び、彼らが2年次に受験したACEテストの結果が1年次に受験したACEテストの結果よりも30ポイント以上伸びた学生の数と彼らが2年生の間に多読・多聴で読んだり、聴いたりした本の1冊に含まれる平均語数の関係を、データに基づき明らかにするという方法で分析した。

(3)当初の予定では、多読の仕方に応じて、学習者を6つのグループに分ける予定であった。

しかし、教育倫理的配慮など(例えば、学習者に特異な多読の仕方を指示して、実施させることは避けた方がよいという判断など)から、当初の予定を変更し、そのような分け方をせず、多読学会などにおいて、多読の効果を調査分析に基づいて発表する際に最近頻繁に用いられている「～語/冊」の指標を用いて、個々の学習者の多読傾向を数的に算出し、そのデータと語感の鋭さや英語のproficiencyを測るテストの結果に基づいて最も効果的な多読の方法を計量的に出すという方針に変換した。しかし、最終的に研究の達成度への影響はなかったものと判断している。

4. 研究成果

(1)新入生の入学時の英語力を測る新入生テストの結果、新入生が1年間に英語多読・多聴で読んだり、聴いたりした本の1冊に含まれる平均語数(彼らの多読・多聴記録用紙から算出したもの)、新入生が入学した年の12月に受験した英語の検定試験ACE(Assessment of Communicative English)の頭文字を取った名前の試験で、900点満点で英語の語感、リスニング、文法、読解など英語のproficiencyを客観的に測る英語力測定試験である)テストの分析の結果、徳山工業高等専門学校の入学生(平成24年度入学)については、図1及び図2の分析結果が得られた。

図1は、徳山工業高等専門学校への入学生(平成24年度入学)が1年生の間に多読・多聴で読んだり、聴いたりした本の1冊に含まれる平均語数(彼らの多読・多聴記録用紙から算出)と、彼らが入学直後に実施した新入生英語力テストの結果の関係をグラフにしたものである。

縦軸は、新入生英語力テストのスコア(100点満点)で、横軸は、彼らが読んだり、聴いたりした本1冊に平均的に含まれる語数を示している。

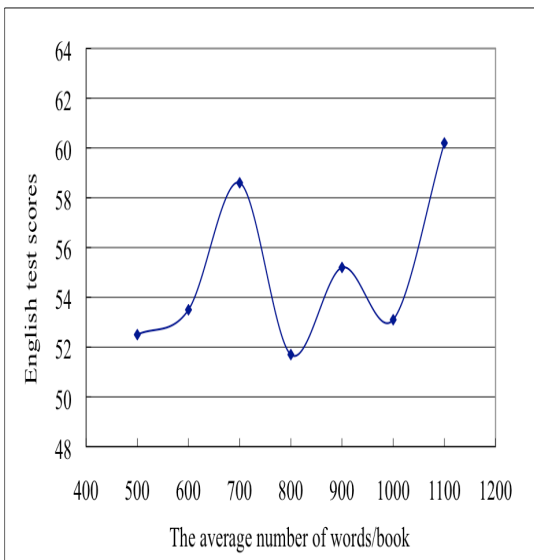


図1 1冊の平均語数と新入生テストスコアの関係

図2は、英語の proficiency や語感がどれだけ身についたかを数値的に測る英語の検定試験 ACE (Assessment of Communicative English) テストの結果 (入学年度の12月に実施) と1年時の多読・多聴で読んだり、聴いたりした本の1冊に含まれる平均語数の関係を示したグラフである。

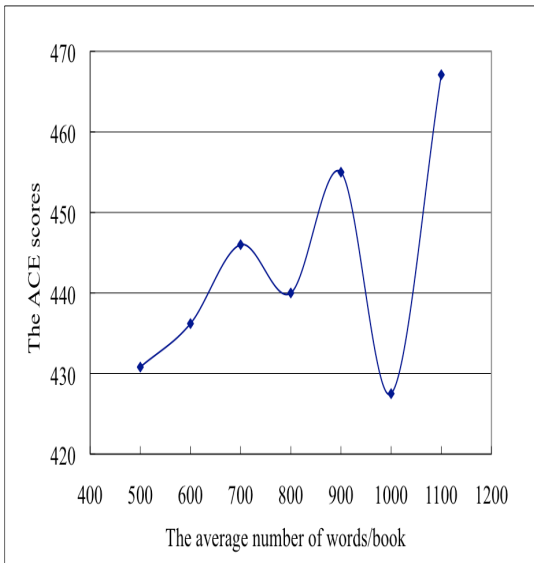


図2 1冊の平均語数とACEテストスコアの関係

(2) 同様に、2年生 (平成23年度入学) については、図3及び図4の分析結果が得られた。

図3は、2年生 (平成23年度入学) が2年次 (2年次の12月に実施) に受験した ACE テストの結果と彼らが2年生の間に多読・多聴で読んだり、聴いたりした本の1冊に含まれる平均語数 (彼らの多読・多聴記録用紙から算出) の関係をグラフにして示したものである。

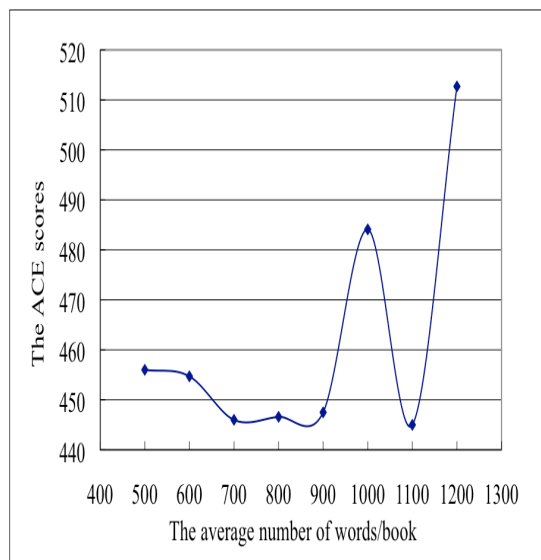


図3 1冊の平均語数とACEテストスコアの関係

図4は、2年生に関して、彼らが2年次に受験した ACE テストの結果が1年次に受験した ACE テストの結果よりも30ポイント以上伸びた学生の数と彼らが2年生の間に多読・多聴で読んだり、聴いたりした本の1冊に含まれる平均語数の関係をグラフ化して示したものである。

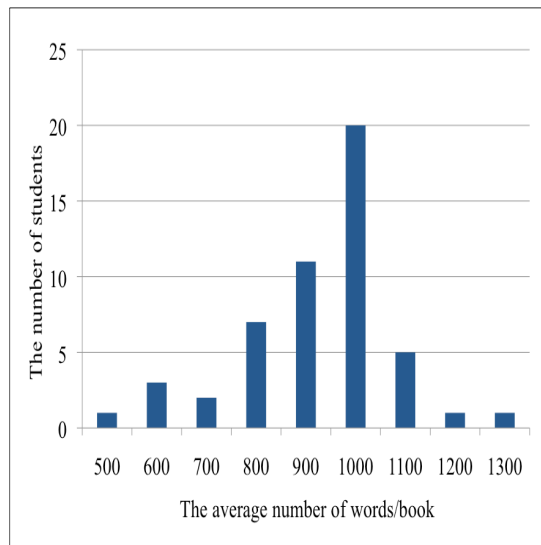


図4 1冊の平均語数とACEスコアが1年前より30点以上伸びた学生の数の関係

(3) 図1、図2についての被験者は平成24年度入学の新入生122人である。

図2から、900語/冊の本を読んだ学生が1100語/冊の本を読んだ学生を除き、最も高いスコアをACEで獲得していることが分かる。1100語/冊の本を読んだ学生については、人数が大変少ないことから、全体の傾向とは言えないので、今後の議論からは外すこととする。もともと英語力のかなり高い少数の学生は読む本も必然的にレベルが

高い語数の多いものになったと考えられる。図1から、入学時の英語力テストのスコアが最もよかった学生群が700語/冊を読んだことが分かる。しかし、この学生群のACEテストのスコアがあまり高くならなかったのは、入学時にある程度の英語力を持っていた学生にとって、700語/冊の本は少し易しすぎたということが考えられる。

また、図1から、入学時のテストでは、900語/冊の本を読んだ学生群と1000語/冊の本を読んだ学生群との間に、スコアの差はあまりなかった(100点中2点)が、12月のACEテストの結果では、図2より、大きな差が出ていることが分かる。

以上の分析結果から、実用英語検定のレベルでおおよそ4級~3級に当てはまる(新入生テスト結果等から算出)徳山工業高等専門学校新入生について、最も英語のproficiencyを効率よく伸ばすには、平均して900語/冊の本を大量(10万語以上が望ましい)に多読・多聴することが望ましいと言える。

(4)図3については、被験者は平成24年度の2年生で2年次のACEテストを受験した120人である。

図3から、1200語/冊の本を読んだ学生群を除き、1000語/冊の本を読んだ学生群のACEテストのスコアが480を超えて最も高い。図2の際の議論と同じく、1200語/冊の本を読んだ学生群は、もともと英語力の大変高い学生達で、人数も少数であるので、例外的なグループであると判断し、今後の議論からは外すこととした。

図4については、被験者は平成23年度及び平成24年度の2年間英語多読・多聴の授業を受け、1年次及び2年次の12月にACEテストを合計2回受けた学生118名である。

この118名のうち、1回目のACEテスト結果よりも2回目のACEテストの結果の方が30点(900点満点)以上伸びていた学生が53名いた。図4はその53名が2年生の間に読んだ本が平均して1冊につき何語であったかと人数の関係を示している。

53名のうち、実にその38パーセントに当たる20名の学生が平均1000語/冊の本を読んでいたことがこのグラフから分かる。

以上の分析結果から、実用英語検定のレベルでおおよそ3級~準2級に当てはまる(1年次のACEテスト等から算出)2年生については、平均して1000語/冊の本を大量(15万語以上が望ましい)ということを実らかにすることができた。

(5)今回の研究では、対象が、研究責任者が平成25年9月まで所属していた研究機関(徳山工業高等専門学校)の新入生及び2年生になっているが、彼らの平均的な英語レベ

ル(新入生=実用英語検定のレベルでおおよそ4級~3級、2年生=実用英語検定のレベルでおおよそ3級~準2級)から、他の学習者グループにも広げることができる点で、この研究成果はある程度の汎用性があると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

- ① Toru KUNISHIGE、Manami FUJII、A Methodological and Numerical Analysis on the Optimum Way for Kosen Students to Read English Books Extensively、Research Reports of Tokuyama College of Technology (徳山工業高等専門学校研究紀要)、査読有、37号、2013、39-42
- ② Hitoshi OGAWA、Benjamin JOHNSON、Toru KUNISHIGE、Ethical English: A Powerful New Tool for World Peace、Research Reports of Tokuyama College of Technology (徳山工業高等専門学校研究紀要)、査読有、37号、2013、43-50
- ③ Hitoshi OGAWA、Kentarou KITAMURA、Takanori KOGA、Ken-ichi FURUTA、Toru KUNISHIGE、On the English Facilitators' Activities as Voluntary Professional Development、Research Reports of Tokuyama College of Technology (徳山工業高等専門学校研究紀要)、査読有、37号、2013、57-62
- ④ 国重徹、英語多読を用いた、英語嫌い・英語学習に対する中だるみ解消の取り組み、平成23年度中国地区高等専門学校教員研究集会講演論文集、査読無、平成23年度版、2011、52-56

[学会発表](計7件)

- ① 国重徹、徳山高専における英語多読・多聴指導の効果、課題、展望、2013年度多読学会年会、2013年8月3日、武蔵野大学
- ② 国重徹、英語多読・多聴指導の効果、課題、展望について—徳山高専の場合、第2回福岡多読教育研究会、2013年8月1日、福岡女学院中学、高等学校
- ③ 国重徹、英語多読指導の効果と落とし穴—多読指導開始後3年経過した徳山高専の場合—、2012年度宇部工業高等専門学校との合同FD研修会、2013年3月25日、徳山工業高等専門学校

- ④ 天内和人、国重徹、高橋愛、徳山高専における英語教育改革―「英語力向上タスクフォース II」の取り組みと効果―、全国高等専門学校英語教育学会第 36 回研究大会、2012 年 9 月 8 日、国立オリンピック記念青少年総合センター
- ⑤ 高橋愛、国重徹、徳山高専における多読授業とその効果、2012 年度多読学会年会、2012 年 7 月 28 日、順天堂大学浦安キャンパス
- ⑥ 国重徹、英語多読指導の効果と落とし穴―徳山高専の場合―、日本多読学会 2011 年度関西多読新人セミナー、2012 年 2 月 4 日、近畿大学
- ⑦ 国重徹、英語多読を用いた、英語嫌い・英語学習に対する中だるみ解消の取り組み、平成 23 年度中国地区高等専門学校教員研究集会、2011 年 12 月 16 日、呉工業高等専門学校広島テクノショップランチ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

国重 徹 (KUNISHIGE, Toru)

鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・教授

研究者番号：5 0 2 2 5 1 7 4